

歌

集

欽

集

昭和二十三年九月二十日發行

歌集

定價 貳百圓

著者

土岐善麿

發行者

東京都中央區京橋三丁目四番地
鈴木三男吉

印刷所

東京都板橋區志村町五番地
凸版印刷株式會社

發行所

東京都中央區京橋三丁目四番地
株式會社
日本評論社

出協會員A一一四〇〇八號
電話京橋(56)六一九一三番
振替東京一六番

本製木所製木膏

目次

黄昏に	一
不平なく	四一
佇みて	七一
街上不平	九七
心遊ばず	一二三
雑音の中	一二九
緑の地平	一四七
緑の斜面	一七九

黄

昏

に

(明治四十五年二月刊)

ソファの上

指をもて遠く迤れば、水いろの

ヴォルガの河の

なつかしきかな。

おほきなる犬を飼はむとおもひけり。

落葉の林を

ひとり歩きつ。

ものを思ひつつ、街路を歩めば、

行人かうじんの顔のさもしさよ。

ぺつと唾つばする。

働くために生けるにやあらむ、

生くるために働けるにや、

わからなくなれり。

寢臺ねだいよりさぐれど、朝の

スリッパの足にかからず、

また寝てしまひぬ。

門の前の、子どもの聲のうるささよ。

書齋のうちを

ひとり歩める。

快く腹のはれるに、

坂路の、まへの車を

つと、押してやりぬ。

髪を長く延ばしてみんか。

とも思へり。

世のいやになる心のいとしさよ。

眼のしたの肉のたるめる不快さよ。

眼を閉ぢ、眼を開け、

それを哀しむ。

わが腦を休めしことの

一ときも無かりしに

ふとおどろけり。

ストライキ

やまんともせぬおそろしさ。

息をひそめて、君を思ふ、われは。

天幕てんとや帆の、

あらし切地きれじの手ざはりの、心にしたし。

秋となれるかな。

家苴けそのうしろに海の

鳴るごとく、ふと佇みつゝ

また歩みゆけり。

忙しくもけふとなれるかな。

わが名すら忘れんとせり、

そと呼びてみる。

非常なる力がほしとおもふかな。

目くらむばかり

不平つのれば。

事ごとに憤りたるごとき

聲をする人の間に

働けるかな。

「うるさし！」とわが叫ぶとき、

一齊におしだまるべき

顔のかなしき。

全身のかすかに痛むゆふべの、

卓子に

地圖をひろぐる。

クロボトキンの『パンの略取』を

半ばまで読みしが——その後、

読むひまのなし。

世の人の、大ごゑあげてわらひぬべき

ことを、わがいつも、

眞面目におもへる。

眼をとづれば、いつでも、すぐに、

ぐっすりと眠らるるごとし。

一人であつたし。

ひさしぶりに、聖書をひらき、

こまかなる文字をながめつ、

泣きたくなれり。

秋の風、

ひとのことばのはしほしの、氣にさはるたび、

口笛をふく。

子をつれて、日ごとに遊ぶ停車場の
廣場の草も

黄ばみたるかな。

やはらかき寢臺に、ひとり、

夜より日に、

心ゆくまで寢たしとおもふ。

海岸の山の湯泉に

行かまほし。

十月の日となりにけるかな。

ものはかなく、腹の痛めるゆふぐれの
十月の樹に

花を見いでし。

寄席の、今、はねし大鼓の
ふとさめし冬の宵寢の

枕になれる。

腹だたく、泣きたくなりぬ。

二人のためのみおもへるごとき

一日なりし。

大ごゑにいきなり呼ぶなかれ。

つかれたる心は、いとし、

つひえんとする。

あはれ、ひさしく怒らざるかな、
今日ひとつ怒らんとして、

をかしくなれり。

世に、かかる嘘さへ

いふものか。

その人の顔をちつと見つめし。

とはうもなき嘘をききしより、

人間がおそろしくなりて、

門を出でざる。

つと傍に、ひるがへりたる

新聞のおとに、いたくも

おどろきしころ。

冬の雨、

わが育ちたる浅草の寺にかへりて、

眠らんとおもふ。

おほかたの、わかきむすこのすることき

不孝をしつつ、

父にわかれぬ。

わがすること、わが言ふことの、

ふと、父にあまり似たるに、

哀しくなりぬ。

ゆふぐれの、卓子のうへにすててありし

おもちゃの笛を

吹いてみるかな。

くるほしく、つよき煙草を喫ひし後、

遠く、シベリアの

雪をおもへり。

すべてを、悪まず、めです、死にしごとき

ころにならんと、

眼をつぶりにし。

泣け、泣け、

たそがれの街に泣ける子よ。

咽のどのさくるまで、泣けよとおもふ。

不平ある心のまへをあゆみ行く

見もしらぬ子の

なつかしきかな。

一日の子守につかれて、うとりとする

夜のやはらかさ。

こほろぎの啼く。

哀しくも、をかしくもなく、おのづから

涙の湧くも

はかなしや、冬。

露西亞卷の煙草を喫ひつつ、

哀しみぬ、

露西亞へ行くは、いつのことども。

わが子と拾ひては投ぐる

十月の、ころしづけき

路の石かな。

大門だもんの車庫の廣場に、

品川の鷗の遊ぶ、

冬のあけぼの。

この國の男も女も、さもしげに

黄いろき顔して、

冬をむかへぬ。

十月のあさのひかりの

すりがらすに、白くよどみて、

蟲のきこゆる。

口のうちの埃の香こそわびしけれ。

たそがれ
黄昏に向ひ、

唾するかな。

指をもて瞼を押せば、

哀しくも、こころよく、

腦のうづくかな。

ゆふまぐれ、

隣のいへの戸を閉づる、

それにも涙浮ばんとせり。

いまもなほ、青き顔して、

革命をひとり説くらむ。

ひさしく逢はず。

労働にやりしいのちの

わかき日の戀のごと、また、

いとほしくなりぬ。

もの言ふを、損することく、

おほぜいの人のうしろに、

火にあたりゐる。

拳銃けんじゆうを握にぎらんとする、——握にぎらんと
おもふだに、指ゆびの

こそばゆきかな。

をさな兒の眠ねらんとして泣なくごとく、

われも、この日ひごろ、

泣なくばかり眠ねらまほし。

人間の立ちて歩あくも哀かなしけれ。

眼めさむれば、ゆふべ、

背骨せこの痛いためる。

かれら、今、

寒ふき街路まちぢをかへるらむ。

日ひねもすわれは家にねむりぬ。

落葉樹らくえつじゆわが庭にわにある、さびしさよ。

たそがれの風かぜの

來きてたたずめる。

この露臺ろだい、うすく埃ちりの沈しみたる

冬の月夜げつやを、

さまよへるかな。

口くちをあけて眠ねるか、われも、

枕まくらのうへに、眼めをとちて、

をかしく、かなし。

むすめよ。

この黄昏たそがれの落葉らくえふを父ちちは焚くわくべし。

燐寸りんそんをもてこよ。

人ごゑの耳にし入らば、このゆふべ、

涙あふれむ、――

もの言ふなかれ、

たそがれの、蜜柑をむきし爪さきの

黄なるかをりに、

母をおもへり。

街角を曲れば、風の

たそがれの一路に黄なり。

うつむきて行く。

労働の

かなしき愉快をあちはひぬ。

ひさしく、われら、會はずあるかな。

隣の灯、――雪となるらむ、――

夜の空に赤くうつれり。

はやく寝ばやな。

眠らんとして、

寢臺のかどの、蠟燭の光を、しばし、

なつかしむかな。

妻と子のあまゆる顔を、

そを、いたく叱らんとして、

浮びし涙。

ひさしく逢はざる顔を

かぞへみて、

忙しき日ごとがさびしくなりたり。

札幌へ行かんといひて、

行かざりき。

あはれ、間もなく雪のふるらむ。

冬の雨。

市街の寺の太木たいぼくの、なつかしきかな、

高く立てるは。

焚火せむ、子らよ、といへば、あつめくる

落葉、木ぎれの、

哀しきゆふべ。

夜の雪、

事業の後の、たるみたる

心のうへに、しみじみとふる。

はんぎょくのゆうべの顔の、

やはらかに見えて、かなしき

あけぼのの雪。

かの、汽船の旅を

おもひいづ。

さびしき冬にまたなりにけり。

門の前、一路の冬に、

六つばかりの子の遊びをり。

風のふきいづ。

死なんとはおもはずなりぬ。

生きんとも

さまで思はずなりにけるかな。

九州の同志のおくれるザボンの實。

かれらも、いま、

さびしく暮らすらむ。

おほきなる、黄なる、あらびたる

ザボンの實、

手にのせてあれば、哀しくなれり。

夜のしぐれ。

卓子つくえのうへを片づけて、

あたらしきバナナをむきぬ。

冬の海、白く光りて、暮れぬらむ、

ひさしく聞かずよ、

千鳥のこゑを。

暖爐すとうぶのほひにむせて、

戸をあけぬ。

あはれ、ながくも語らひしかな。

手袋に、月夜の露の沁むことか。

どこまでも、

どこまでもあゆみ行かまし。

冬の夜の室へやをあゆみつつ、

ことごとといふ、わが

靴のおとをたのしみり。